HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌの物語における否定発話 : ストーリー展開に関する役割として
Author(s)	ヌルミ, ユッシ
Citation	北方言語研究, 14, 197-218
Issue Date	2024-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/110535
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92085
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_Nurmi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 14: 197-218（日本北方言語学会 2024）

アイヌの物語における否定発話
―ストーリー展開に関する役割として―

ヌルミ　ユッシ
（北海道大学大学院）

キーワード：アイヌ語、否定、発話機能、語用論、物語分析

1. 初めに

本論文では、否定（*negation*）に語用論的観点から注目し、アイヌの口承文芸の物語における否定発話はストーリー展開に関してどのように機能しているのかを研究する。否定は、形態・統語的な要素のみならず、語用論的にも非常に重要な役割を果たしていると論じられている（Horn 2010, など）。否定は肯定より「非情報的（*uninformative*）」（Horn 1989; Leech 1983）といわれ、肯定に対して有標的（*marked*）（Givón 1978）、つまり明白に文中で何らかの形で表す現象である。しかし、否定が表す非出来事（*non-event*）が旧情報ではなく新情報として解釈できるとされている研究もある。

否定は否認やコントラストをはじめ、様々な談話的機能を持っている。例えば、物語分析（*narrative analysis*）という分野では、物語における否定は「評価」（*evaluation*）という機能が重要とされている。評価は一般に物語の趣旨（*point*）、すなわち物語られる理由を明白にするという（Labov 1972: 366）。したがって、評価はその物語の伝えらえる価値（*reportability*）を主張し、語り手の聴衆へその物語を伝えたいということも反映するという（Yamada 2003: 217）。評価は、語り手と聴衆との相互作用的な役割もあり、しかも物語の中のある要素を他の要素と比べることによって語り手の物語への感情も表されるという（同書）。さらに、Labov and Waletzky（1997: 37）によると、評価機能は物語のある要素を強調することによってその重要性を他の要素と比べることによって、語り手の物語への態度も表すという。

Labov（1972）では、「否定は何かが起こる/起こったという前提を負かす」と述べられ、物語のストーリーでは主に「起こった」出来事が伝えられるが、否定の発話は、想定されたが実際に起こらなかったことを表す。

> *The use of negatives in accounts of past events is not at all obvious, since negation is not something that happens: rather it expresses the defeat of an expectation that something would happen. Negative sentences draw upon a cognitive background considerably richer than the set of events which were observed. They provide a way of evaluating events by placing them against the background of other events which might have happened, but which did not.*
>
> （Labov 1972: 380-381）

つまり、否定の使用は何かが起こるだろうという期待を破ることを表し、他の出来事が成立させる背景に対して評価されているという。要するに、出来事（*events*）と非出来事（*non-events*）との対照を示している（Yamada 2003: 216-217）。言い換えれば、Labov（1972）は否定を比較器（*comparator*）とし、起こった出来事を起こらなかった出来事と

評価するための道具としている。実はLabov（1997: 403-404）では、否定が評価という機能を持つ最も重要な要素の一つであるとされている。

また、Yamada（2003: 264）は評価に関して、いわゆるストーリー展開否定（*storyline negation*）という、重要な非出来事を表すための否定文を挙げている。ストーリー展開否定は物語の背景ではなく、前景（*foreground*）に現れているといい、ストーリーに関して重要な情報を提供しているとされている（Yamada 2003: 264-265）。本研究でも、否定は「評価」として機能し、ストーリーを展開させることもあるものとして捉えていく。

このように、本研究では否定発話がストーリー展開に関して、アイヌ語でどのように用いられるのかについて調査する。同時に、否定がどのようなコンテクストにおいてどういった情報に関してレトリックとして使用されるのか、その使用はどのような理由が考えられるのかについても考察を行う。

2. 否定とアイヌ語

ここで、本研究で否定をどのように捉えていくのかについて述べる。否定（*negation*）と否定性（*negativity*）は似ているが、前者は形態・統語論的な「否定」「肯定」の対立における文・発話の性質を指す。例えば英語の「*not, n't*」あるいは日本語の「〜ない、〜ん」という、言語における最も一般的な肯定文を否定するための標準的否定（*standard negation*）のことを意味する。後者は、その語が内的に否定の意味を含んでいるように扱う。また、否定は文否定（＝文全体が否定の対象となる（*sentential negation*））および構成素否定（＝文の一部だけが否定の対象となる（*constituent negation*））の二種類に下位分類できる。本稿では、この両方に注目する。まず、アイヌ語における文否定について述べる。標準的否定は、一般的に *somo* という否定副詞を用いる。動詞句の直前位置に置かれると、*somo* はその句を否定する（田村 1997: 31, Tamura 2000: 94）。

(1) a. *somo ku-ku kusu ne* b. *tapan pe seta somo ne* c. *somo neno ku-yaynu*
NEG 1.SG-drink intention COP this NMLZ dog NEG COP NEG like.this 1.SG-think
「私は飲みません。」 「これは犬ではない。」 「私はそう思いません。」
（田村 1997: 31）

（1a）では否定辞 *somo* が動詞句 *ku-ku* の前に置かれ、それを否定化している。このあとに *kusu ne* という意志や未来の「これからするつもりである」という意味を表すコピュラ句が現れている。細かく分析すると、NEG は[*ku-ku*]を否定するが、[[*kusu*] *ne*]はその作用領域に含まれておらず、[NegP]（否定句、*Neg Phrase*）に対して *kusu ne* が話し手の行為への意図を表し、これから行われるという意味を表している。（1b）では *somo* がコピュラの直前にあり、コピュラ句を否定し、「*tapan pe*」という対象に関して「*seta*」という性質が相当しないことを表す。（1c）では、*somo* が[*neno ku-yaynu*]という動詞句を対象にしていると考えられる。

なお、他の文否定作成手段もある。例えば「*somo ki*（NEG do）」という構造であり、*somo* は形式的に *ki* を否定するのだが、*somo* の前に現れる動詞を名詞句として扱い、*ki* の目的語と捉えられていることを意味する（Bugaeva 2012: 496）。多くの場合、*somo ki* の前に *ka* と

いう限定詞のような助詞を付けることが多い[1]。

(2) *pase ka somo ki, kosne p ne wa.*
be.heavy even NEG do be.light NMLZ COP SFP
「重くなんかない、軽いものだよ。」

（田村 1997: 43）[2]

上記のような *somo* と動詞を含んだ否定文に対して、*somo* は単独で現れることもある。そういうときは、*somo* が動詞句として働くことがある（田村 1997: 31）。

(3) *tonpuri a-ari yak pirka p somo wa.*
bath 4.A-heat if be.good but NEG SFP
「おふろをたけばいいのにたかないわ。」

（田村 1997: 31）[3]

つまり、上記の用例では、*ari* という動詞を繰り返さずに、*somo* のみで「おふろをたかない」という意味が伝えられている。省略されていた内容は前のコンテクストから解釈でき、*somo* がコンテクストによって可能な語用論的な意味を多く持っているわけである。また、英語やフィンランド語などの多くの言語では、冗長性を避けるために要素を省略することができ、アイヌ語も同様のようであるが、この現象は実際にどの程度みられるかについてさらなる研究が必要である。

さらに、アイヌ語は様々な否定的な意味を持つ動詞が見られる。例えば状態的述部という「X is my mother」、「X is tall」、「X has a dog」などのような状態を表す述部の否定は、類型論的に非標準的否定が一般的にみられるという（Kahrel 1996; Miestamo 2022: 929）。アイヌ語の場合は、例えば所持（*possession*）や存在（*existence*）の場合は、通常標準的否定ではなく、非標準的否定の要素が主に使用される。

(4) a. *kor sak* b. *an/oka isam*
possess possess.NEG[4] exist.SG/exist.PL exist.NEG

上記から分かるように特に所持および存在は非対称的な関係にある。所持の否定の際は *sak* という独立した否定動詞が一般に使用され、存在・位置の際は *isam* が一般に用いられる。この場合の位置は「X is in the room」のような構造を指している、つまりアイヌ語では *an/oka* と *isam* を通して X がどこに存在しているかしないかを表現できる。また、*isam* は「非存在」以外に「無くなる，死亡する，～（て）しまう」という意味も持っており、*sak* は他動詞で「～持っていない，～欠いている，～無くす」という意味もコンテクストによってみられる[5]。これ以外の否定の意味を持つ動詞があり、例えば *eraman*「分かる」、

[1] 肯定文では日本語の「も」のような意味をし、「X も Y も Z をする」のような構造で用いられる。しかし、否定文においては圧倒的に多く用いられている。
[2] 沙流方言では、「*ka*」は予想されない意外なことを表す（田村 1997: 43）。また、強調的な否定の表し方としても捉えられ、*ka* を付加すると、*somo* の前に現れる名詞句を焦点にすることができる場合もある（Bugaeva 2012: 496）。
[3] グロスは筆者より。
[4] *sak* や *isam* は内在的否定（*inherently negative*）語彙項目としても捉えられる。例えば *sak* の場合は英語の「*lack*」に似たように、意味は否定的であるが、形態論的に否定というわけではない。すなわち、この語は否定辞（アイヌ語の場合は *somo*）ではない。
[5] しかし、*somo an*（NEG exist.SG）は完全に不可能なわけではなく、例えばアイヌ民族博物館アイヌ語アー

erampewtek「分からない」という対立や、語形成による *somo* を含んだ複合語なども多少みられる[6]。

否定的な命令文（禁止）も調査対象となるので、簡単にアイヌ語の命令文についても述べておく。命令法（*imperative mood*）は、動詞をそのまま、主語の人称接辞を付けずに成立させる[7]。なお、対象が複数の場合は、*yan* という要素を動詞の後に付ける。また、*yan* は複数に限らず、丁寧性も持っているため単数の際でも用いられる場合がある。主語の人称接辞を取ることができないが、目的語の人称接辞は命令法を取った動詞に付けることが可能である。

(5) a. *nu*　　b. *nu*　*yan*
　　listen　　listen　IMP.POL
　　「聞きなさい！」　「聞きなさい！（二人以上）」

（田村 1997: 75）[8]

(6) a. *rok*　*yan!*　　b. *en-siknu-re*
　　sit.PL　IMP.POL　　1.SG.O-be.alive-CAUS
　　「座って下さい！/座れ!（二人以上）」　「私を生かせ！」

（Bugaeva 2012: 496）

否定的な命令文の場合、典型的な命令は対称的な関係を成している。つまり肯否は禁止の副詞の有無のみで異なっている。例えば沙流方言では下記のようである。

(7) a. *iteki*　*ye!*　　b. *iteki*　*ye*　*yan*
　　PROH　say　　PROH　say　IMP.POL
　　「言うな、言わないで！」　「言うな、言わないで！（二人以上）」

（田村 1997: 76）

上記でみられるように、典型的な禁止構造は沙流方言の場合、禁止の副詞である *iteki* を動詞句の前に置くことによって成立する。また、*yan* を文末に付ければ、複数の聞き手に対して発言されていることが明らかになる。

最後に、構成素否定について簡単に述べておく。文否定と異なって、構成素否定は文の一部だけを対象にしている否定である。例えば、英語などでは「[***Not all of them***] *regarded it as a success*」（Huddleston and Pullum 2002: 807）のように、「全員（*all of them*）」が否定されており、「（それが）成功だと思ったのは、全員ではない」を意味する。アイヌ語沙流方言は、*-ko* という接尾辞がある。これを自動詞に付けると、逆の意味の副詞が作られる（田村 1997: 65）[9]。

カイブでは若干見られる。また、*somo kor*（NEG possess）という構造もみられるが、*sak*（possess.NEG/lack）と意味的にどのように異なっているのかについては、まだ確認されていない。

[6] 例えば *somo-ipe-re*（NEG-*eat*-CAUS）「食べさせない (VT)」や *i-somo-mokor-e*（APASS-NEG-sleep-CAUS）「（人を）眠らせない (VI)」や *ko-yay-somo-mokor-e*（APPL-REFL-NEG-sleep-CAUS）「（何かをするために）自分を眠らせない (VT)」など、*isomomokore* のような自動詞も *somoipere* のような他動詞も多少存在する。

[7] 平叙文の形でありながら、語用論的に命令として解釈できる構造も多くある（詳しくは田村 1977 を参照）。

[8] 田村（1997: 75）によると、*nu* も *nu yan* も、命令の対象が単数の際に用いることができる。

[9] また、性質を表す感情のこもった反語的意味の副詞をつくる接尾辞であるという（田村 1996: 314）。例えば *wen*（be.bad）に付ければ *wen-ko*「ほんとうによく」となる（田村 1997: 66）。さらに、*-ko* を構成素否定

本研究では、標準的否定のみならず、いわゆる語彙的否定動詞（*lexical negative verbs*）、つまり内在的に否定的な意味が含まれている動詞も「否定」として扱う。また、モダリティ表現に含まれる否定的な命令文（*negative imperatives*）や否定的な疑問文（*negative interrogatives*）も本稿で文否定の一部として捉える。命令文や疑問文は物語では、聞き手の注意を引く効果があり、ストーリー展開にも繋がると考えられる。例えば、登場人物が他方の登場人物に対して否定的な命令をすると、命令された側の次の行為によってストーリーが発展する。また、構成素否定、あるいは部分否定（*local negation*）にも、聞き手の注意を引く効果があるので、これについても論じる。

3. 方法と資料

本稿では主に沙流方言の言語資料を用いる。具体的にいうと『アイヌ語音声資料』（田村 1985-1986）、国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブにおける沙流方言の資料、そして NINJAL（国立国語研究所）の『アイヌ語口承文芸コーパス―音声・グロス付き―』ウェブ上で掲載されている沙流方言の資料を用いた。これらの中には、いくつかのジャンルの物語の資料が含まれているが、今回は「散文説話」とも呼ばれるアイヌ語沙流方言で *uwepeker* と呼ばれる人間についての物語を中心とした。*uwepeker* も一般に四つ程度の下位範疇に分けることができる。それらはアイヌについての物語、カムイについての物語、和人についての物語（*Japanese prose tales*）、そして *Pananpe* と *Penanpe* についての物語である（Endō 2022: 375）。呼び方通りのアイヌつまり人間についての物語は、主人公は人間であり、多くの場合は主人公を名前で呼ばずに、「どこかの村長、どこかの村長の妻」などと呼ばれる場合が多い。長い物語では、途中で主人公が変わる場合もある（同書 376）。このような *uwepeker* の構造は一般的に次の通りである。まず、主人公の生活・家族状況が明らかにされる。例えば「父と母を持ち、父は沢山の獲物をとれ、豊富な生活を送っていた」のような説明である（同書）。物語のストーリーは主に、主人公はある日何かの出来事あるいは問題にあい、自分の知識あるいはカムイからの手伝いによってその問題を乗り越え、その後結婚し子供を作り、人生の最後まで幸せに生きて行き、老いたら自分の子供にその物語や経験を伝えるというようなパターンが多く見られる（同書）。主人公は様々な苦労をしながら、良い意志を持っているためカムイに恵まれ、いわゆるハッピーエンディングになる一方、良くない心持ちの人やカムイは、酷い死をするように罰せられるというストーリーがみられる（同書 376-377）。

方法としては、否定が明確に現れるストーリーを言語資料の中で探し、否定発話が用いられるコンテクスト上および物語のストーリーの流れに関する機能を、否定の談話・語用論に関連する理論を用いて調査した。また、否定は物語において「評価的」と捉え、ストーリーの中の重要な時点・出来事を表すものとして扱う。このような物語分析の道具を用い、それぞれの物語のストーリーを熟読し内容を理解した上で分析を行った。なお、否定発話の分析には、制限した文よりも、ストーリー全体が成立させる広いコンテクストの理

として扱われているものは、アイヌ語十勝方言に関する研究がある（例えば高橋（2016）や Takahashi（2022））。

解が特に重要である。これは、評価として機能する否定は、ストーリー全体に反映されることもあるからである。

4. 否定のストーリー展開に関する機能

ここでより具体的に先行研究で論じられる否定のストーリー展開に関する機能について述べる。先行研究では、主に英語や日本語などのテキストで現れる否定発話の発話機能に注目され、例えば問題を表示する機能（Pagano 1991, Yamada 2003）や物語の転換点を表示する機能（Hwang 1992, Yamada 2003）がみられる。

Pagano（1991）でも Yamada（2003）でも、否定は物語の中で問題を表示する機能（*negation as a marker of problem*）も持っているとされている。彼らによる「問題」というのは、物語の中で現れる困難な状況についての問題的な側面を意味する。否定によって問題を示すのは、Yamada（2003: 348）によると、語り手あるいは聞き手の何かの叶わなかった想定、つまり期待が外れたこと（*defeat of expectation*）を表すので、予想通りに起こらないことが物語の中で問題を生じさせるという。Pagano（1991: 77）では、英語における問題を示す否定発言は叶わなかった予想（*unfulfilled expectation*）を表し、具体的にいうと話題に重要な情報の欠如あるいは現状への不満という問題を指している。

また、物語の中では、英雄が何かの目的を持っているのだが、それを達成することを妨げる問題に出くわす傾向がみられる（Hatch 1992; Yamada 2003: 350）。確かに、アイヌの物語の中でも主人公は何かの目標があり、途中で問題が発生するが、努力しながら神々に恵まれるとその問題を乗り越えるというパターンはそれほど珍しくはないといえる。さらに、「問題」は、あくまでも日本語の口語的物語の場合に、問題の解決法が物語の展開の中で発見できるように、問題の提示がその物語の冒頭部分で取り上げられる傾向がみられる（Yamada 2003: 347）。アイヌの口承文芸の物語もこのような場合がある。

Yamada（2003: 350）は、否定は常に問題を表すわけではないため、「問題（*problem*）」、「非問題（*non-problem*）」そして「中和的使用（*neutral use*）」の三つに分けて否定発言を分析している。ここでの「問題」とは、物語において例えば喧嘩、争い、痛み、病気などのような主人公に不愉快さを感じさせる側面を表し、「非問題」は「問題」と逆意味で、主人公にとって有利な状況を示す（同書）。最後に、「中和的な使用」とは、問題でも非問題でもなく、その状況に関する背景情報あるいは記述的情報を与えるという（同書）[10]。これは、ストーリー展開に影響を与えずに、話題管理（*management of topics*）のために用いられているという（同書）。なお、本稿ではストーリー展開に関連する否定が用いられるコンテクストに注目するので、否定の中和的な使用は研究領域に含まない。

さらに、否定は物語の中の転換点（*turning point*）として機能することがある。転換点は、ストーリーの方向性における変化を表す（Hwang 1992: 335; Yamada 2003: 361）。同時に、転

[10] Yamada（2003: 358）によると、中和的に使用される否定発話は、いわゆる部分評価（*local evaluation*）であり、「追加情報」を文脈に与えているという（同書 252）。この「追加情報」は、ストーリー展開ではなく、物語の中における「サイド・トピック（*side topic*）」についてであるという（同書 254）。例えば、ストーリー展開に関係のない、物語の登場人物あるいはもの・場所に関する詳細における否定、例えば：「家に帰った。その家は、壁が白くなかった。赤だった。家に入ったらすぐ寝室へ行った。」などのように、ローカルな話題に関する情報として機能している否定発話を指すと考えられる。

換点はストーリーに関する評価的な点（*evaluative point*）として機能し、ストーリーにおける重要な点を示すことがある（Yamada 2003: 363）。転換点として機能する否定は、転換点を過ぎる前まで「次こうなるだろう」という前提を破ると、ストーリーが新しい方向へ行き（同書）、聞き手の注意をさらに引くことに繋がると考えられる。

また、ストーリー展開には直接関係していないが、物語は語り手と聞き手両方いなければ、物語る意味がなくなる。したがって、聴いている側も必要であり、その聞き手の関心を生み出させる必要もあると考えられる。Chafe（1994: 112）によると、語り手は聴衆が考えていることに関する想定に基づいて、聴衆のために言葉遣いを適応するという。同じように、山田（2013: 32）によると、否定表現の使用は聞き手の注意を引く効果を持っている場合があり、つまり受け手の想定に配慮しているという点で,「受け手指向」（*recipient design,* Yamada（2003: 333）の用語）の発話として機能する場合がある。すなわち、否定発話を通して聞き手の注意を引き付けようとする効果があるといい、聞き手を物語へ導く「引き込み方略（*involvement strategy*）」としても同時に機能しているという（Yamada 2003: 332; 山田 2013: 32）。

5. アイヌの口承文芸における否定発話の機能

ここで、本研究の研究資料の分析結果について述べ、否定表現が使用されるコンテクストを挙げながらそれぞれのストーリー展開に関する機能について説明する。5.1 節では「問題」を示す否定について述べる。5.2 節は「非問題」、つまりコンテクスト上で問題として解釈不可能な否定について述べる。その後、5.3 節と 5.4 節で物語の冒頭および最終部分という位置における否定について述べる。

5.1 問題

ここで登場人物にとって「問題」を表す際の否定表現について述べる。Yamada（2003: 347）によると、問題は物語の冒頭部分で現れるのが比較的多いという。なぜなら、その問題を解決するための旅が物語全体のストーリーを進めるからである（同書）。Yamada（2003）でも、日本語の物語の中で否定が問題点を表すことがあるが、否定と問題の関係性はそれほど密接ではないとされる。なお、否定の使用は期待が外れたことを表すため、この外れた期待が物語の中で問題を生じる可能性が高く、例えば Pagano（1991: 77）によると英語の場合はいわゆる問題・解決パターン（*problem-solution pattern*）が否定の際に頻繁に現れるという。すなわち、否定を通して問題点が先に示され、その後にその問題点の解決法が挙げられるというパターンのことである。

さて、アイヌ語の *uwepeker* においては、どのようなコンテクストでどのような内容が否定を通して問題点として表示されるのであろうか。分析においては多少困難な面があった。例えば、Yamada（2003）は、あくまでも日本語の場合は物語の冒頭部分における問題の表示が一般的であると主張しているが、冒頭部分はどこまで続くのかということを判断するのが常に簡単なわけではない。また、登場人物の立場によって、否定の解釈が異なる場合もある。さらに、どの程度の問題であるのか、つまり物語全体のテーマとして働く問題なのか、あるいは物語のその時点における登場人物のローカルな問題なのか。これらの面を

了承したうえで、実際の用例をみながら述べていく。

最初の用例は、主人公が女性のアイヌであり、夫が亡くなっているが、息子と一緒に住んでいる物語からである。ある日、息子が同じ村に住む女性を嫁にもらい、三人で暮らすことになる。充実した日々を過ごしたあげく、主人公は目が見えなくなり、親子関係が悪化し、主人公にとって問題が発生する。

(8) *hemtomani wano, nisapno arsiknak-an. hine, orowano,*
recently from.onwards suddenly become.blind-4.S CON then
*nep ka a-kar ka **eaykap**. wa, ene iki-an hi ka **isam** wa,*
what even 4.A-make even be.unable CON like.this do-4.S NMLZ even exist.NEG CON
heru an, apekur takup a-ki wa, a-kosmaci,
merely exist.SG warm.oneself.with.fire only 4.A-do CON 4.A-daughter.in.law
usa iyuta, usa suke ki wa, heru, ipe takup a-ki kor oka-an.
various grind.grains various cook do CON only eat only 4.A-do PROG exist.PL-4.S
*ruwe ne a p, hemtomani wano, a-i-ipere katu ka **isam**.*
INF.EV COP PERF but recently from.onwards 4.A-4.O-feed sight even exist.NEG
「このごろ急に私の目が見えなくなってしまいました。そしてそれからは、私は何もすることができません。それでしかたがないので、ただ火にあたっているだけで、嫁がひえつきとか炊事とかをして、私はただ食べるだけで、暮らしていました。ところが、このごろほとんど私にものを食べさせてくれなくなりました。」

（田村 1985: 2）

主人公が、原因不明で目が見えなくなり、家事などができなくなり、息子の嫁が全てをすることになる。しばらく何もしていないと、息子の嫁が主人公に食べものを食べさせなくなる。ここで、いくつかの否定的な要素が現れるが、*somo* が用いられた文は一つもない。まず、「*nep ka a-kar ka eaykap*」では、*eaykap* が助動詞として機能し「*a-kar*」に「できない」というモダリティを加える。これは主人公にとってやや深刻な状況であり、自身の自由を失うのであろうから、問題として捉えられる。次は、慣用的な表現のようだが、「*ene iki-an hi ka isam*」といい文字通りに「どう（私が）することも存在しない」となり、主人公のこの状況への不快な気持ちおよびこの状況を受け入れることを表すのではないか。最後に、このコンテクストにおいて最も大きな問題点が現れる：「*a-i-ipere katu ka isam*」。さて、これらの否定の出来事が関連し、主人公は家事をするのが不可能であることが、今後のストーリーの発展に影響をし、さらに否定のコンテクストが生じる。家事に貢献ができないと、息子の嫁が主人公へ食料を与えなくなる。これらの三つの否定的な文の連続は、さらに評価の効果を増やしているとも考えられ、主人公の無力感にも繋がるというように解釈するのが可能であろう。このように問題を表す否定文は、聞き手の興味を引き、主人公はどのようにこの問題を乗り越えるのかと考えさせるのではないか。

次の用例は物語の冒頭部分に現れ、主人公の状況についての新情報を与えているが、同時にストーリー展開に影響を与えている否定発話であり、「問題」を示すように解釈できる。

(9) *i-pirkakor kor… kor i-nunuke kor oka-an pe ne kor ora*
4.O-cherish PROG PROG 4.O-take.care.of PROG exist.PL-4.S NMLZ COP then then
posak-an wa poeykoytupa-an.
not.have.children-4.S CON desire.children-4.S
「私を盛り立て、尽くしてくれながら暮らしていたのですが、私たちには子どもがなく、欲しいと思っていました。」
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：N001P.006-007）

ここでは「*posak*」という動詞が現れ、「子どもを欠く」あるいは「子どもを持たない」を意味する。「子ども」を意味する「*po*」と「*sak*」という二つの要素からなる複合語であり、上記で触れた内的に否定の意味を持つ動詞である。否定辞ではないが、コンテクスト上でも否定的な意味を成しているため、本研究ではこれも「否定表現」として捉える。これを「否認」として分析できるかは確実ではないが、否定的な命題であろう。また、否定の出来事でありながら、物語の全体を見れば、厳密にストーリー展開に関連しており、主人公にとって問題点を表している。ストーリー展開との関係性を説明すると、この物語では、主人公が子供を持っていないことが特に主人公の妻にとって大問題であり、主人公にもう一人の妾を持ってほしがっている。何回かこう言われると、主人公が結局もう一人の妾をもらい、子供ができ、結局本妻がこの妾に呪いによって殺されるという方向に展開する。妾も殺されるが、物語の最初の方の「問題」によってストーリーが非常に悲劇的に展開し、主人公が苦労していく。

さらに、直接主人公の観点からみれば「問題」として解釈しにくいが、ストーリーの中で一般的な「問題」に近いような場合もある。この用例では、主人公が耳にする伝言には次の問題点が現れる。

(10) *ene inu-an hi ”Sapporo sekor a-ye sisam kotan un aynu sap kor*
like.this hear-4.S NMLZ Sapporo QUOT 4.A-say Wajin[11] village DIR person go.down then
ora hosippa isam” sekor hawas hawe a-nu kor an-an.
then come.back.PL exist.NEG QUOT rumour REP.EV 4.A-listen PROG exist.SG-4.S
「このようなことを耳にした−「札幌と呼ばれる和人の村へアイヌが下って行くと帰ってこないのだ」という話を私は聞きながら私は暮らしていた。」
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：N003P.191-194）

ここで現れる否定は、非存在を示す *isam* である。通常、自動詞＋CON＋*isam* という構造がされているが、ここでは自動詞＋*isam* という構造となっている。ここで「帰って来ない」のように訳されているが、ここで何かの形式名詞が省略されていると可能性がある。例えば *hosippa hi*（*ka*）*isam* あるいは *hosippa ruwe*（*ka*）*isam*（帰る跡がない）という構造がより一般的なのではないかと考えられる。ストーリー展開に関する機能の話に戻ると、この噂を聞いた主人公は物語の少し後の時点では、この否定の出来事に基づいて札幌への旅を開始する。

このような、ストーリー全体に影響を与える出来事は、「全体評価」（*global evaluation*）

[11] アイヌに対して、「日本人」を指す。

と呼ばれる。全体評価は、物語の要旨に関して重要な情報を提供し、ストーリー展開に貢献している評価のことをいう（Yamada 2003: 239-241）。結論からいうと、この物語では主人公は札幌へ出発し、「帰って来なかった人」を殺した巨大な猫に会う。主人公の犬がこの猫を殺し、主人公が結局この猫の元の飼い主であった和人の家に辿り着き、交渉する[12]。要するに、問題が指定されることによってストーリーが展開し、主人公が問題の解決法を発見するので、この否定発話はストーリーに関する全体評価として機能していると分析できるのではないか。

5.2 非問題

「問題」を示す否定はおそらくもっとも受け入れやすく、Yamada（2003）の研究結果でも最も多く現われている。一方、非問題は、例えば語り手が自分の過去のある時点に起こった愉快さを感じさせた出来事に対して「忘れられない」といい、形態上では否定にもかかわらず、「良い経験を忘れられない」という意味であるため、語り手にとって問題ではなくむしろ非問題を表すものである（Yamada 2003: 350-351）。アイヌの物語の場合は、当然個人的な経験の話ではないため、「忘れられない良い経験」を表すのは考えにくい。しかし、アイヌの物語でも「非問題」として捉えることができる否定が現れる。例えば物語の冒頭部分においてそのストーリーの設定が語られる部分では、主人公の家族関係や仕事などその時の現状について説明されるが、多くの場合はかなり充実した生活を送っていることが否定を通して表されている。Yamada（2003: 352）も非問題は、主人公の立場からみれば好都合の状況を表すと述べている。

(11) *a-hokunispake ka ison wa easir, nep a-kor rusuy ka somo ki.*
4.A-husband even be.a.good.hunter CON entirely what 4.A-possess DES even NEG do
asinuma ka, yuptek menoko a-ne p ne kusu, usa toyta haru,
I also be.diligent woman 4.A-COP NMLZ COP reason various farm harvest
kina haru, poronno a-kar wa a-hokuhunispake ka,
grass harvest a.lot 4.A-pick.up CON 4.A-dear.husband even
ison pe ne kusu, kam hene, cep hene, kina haru hene
be.a.good.hunter NMLZ COP reason meat or fish or grass harvest or
a-e rusuy ka somo ki no, uheturaste-an wa,
4.A-eat DES even NEG do CON live.happily.together-4.S CON
uwepirka-an kor, oka-an pe ne korka, ukoposak-an
take.care.of.each.other-4.S PROG exist.PL-4.S NMLZ COP but mutually.not.have.children-4.S
wa, tan pe patek, a-e-ramu ka pekamam[13] *kor oka-an pe ne.*
CON this NMLZ only 4.A-APPL-heart even worry(?) PROG exist.PL-4.S NMLZ COP
「主人も獲物がよくとれて、私たちは何も欲しいとも思いません（＝何の不足もありません）。私も働き者の女ですから、畠の作物とか、野草とかを、沢山とり、主人

[12] 争いにはならず、和人からアイヌへ補償が与えられるという内容で続き、主人公にとっては良い結末となる。
[13] *eramu-pekamam* という他動詞が「～がつらい、～で苦労する」を意味する（田村 1996: 116）。

も獲物がよくとれるので、肉でも、魚でも、野菜でも、食べたいとも思わず（＝何も食べ物に不自由をせずに）、一緒に幸せな暮らししていたのですが、二人の間に子どもがなくて、これだけをつらく思っていました。」

（田村 1985：16）

この物語では、主人公の夫は狩りが上手という能力・スキルを持っていることによって、多くの肉や魚などを獲れ、主人公とその家族は食料が豊富にあるのである。また、主人公自体が「働き者」という属性を持っていることも重ねると、食料の豊かな生活を送っていることが分かる。したがって当然、食料が豊富に獲れるのは主人公にとって良いことであり、「食べたくない」とは問題とはいえず、Yamada（2003）の用語であると非問題に近いのではないか。この非問題は否定を用いて示され、直訳すれば「何も持ちたくない」や「肉や魚や野菜が食べたくない」となっている[14]。この二つの否定文は、主人公の夫は「獲物がよくとれる」という有利を強調し、認知上で否定的よりも肯定的な「豊富さ」を表しているといえる。なお、この表現は非常に多くの似たような物語の冒頭部分で用いられているため、慣用的な表現ともいわれ、*uwepeker* の一つの決まり文句のように考えられていることもある。しかし、なぜここで否定が使用されているのか。

アイヌの *uwepeker* の多くは、主人公あるいは主人公の配偶者は何らかの形で普通の人ではなく、「*sino nispa*（truly rich.man）」や「*sino katkemat*（truly lady）」などのように一般人より「偉い者」であるので、「狩猟が得意である」という性質が当たり前のことのように受け入れられる[15]。したがって、主人公は「*kam hene cep hene a-e rusuy ka somo ki*」が問題なくいえるのであろう。また、食料に恵まれ、「何を食べるのか」ということを考える必要もないという生活を送っているが、それはおそらくかつての伝統的なアイヌの村の生活ではめずらしい現象だったかもしれない。また、「非問題」でありながら、この否定の使用は最上級表現（*superlative expression*）としての解釈もできなくはない[16]。最上級表現として捉えると、語用論的に「否定」の意味が無くなる可能性もあり、反語的な捉え方も可能であろう。

5.3 登場人物の紹介

ここで、物語の冒頭部分、つまりはじまりにおける主人公や他の重要な登場人物の紹介における否定表現の使用について述べる。Yamada（2003: 286）によると、口頭物語（*oral narrative*）の冒頭部分、いわゆる *orientation*（オリエンテーション）という部分においてはその物語に関する背景情報を提供するといい、「だれ、いつ、どこ、何」という、その物

[14] 原文では、補足として「何の不足もありません」や「何も食べ物に不自由せずに」と述べられる（田村 1985: 7）。つまり、文字通りの「～したくない」よりも、不足や不自由がないということを間接的に否定的な願望表現で示される。

[15] 多くのこのような *uwepeker* の主人公は「本当の長者」あるいは「立派な婦人」である（中川 1997: 87）。

[16] この考えは、2023 年 11 月 18 日に、「日本北方言語学会第 6 回大会」にて、『アイヌ語における否定の否認機能 ―口承文芸テキストでの使用―』（ヌルミ 2023b）というテーマの発表に関する聴衆からの質問で得られた。つまり、食料が非常に多いという意味にすぎなく、文全体は意味上で否定的ではなく、肯定的な意味として捉えられる可能性があるという。この考えを提供した聴衆の方は、Bugaeva（2015）の研究における最上級表現についても述べ、「*nep a-e rusuy ka somo ki*」もその一種なのではないかと推測していた。用例（12）のあと、より詳しく Bugaeva（2015）について述べる。

語に関して重要な点を聞き手に明らかにする[17]。アイヌの口承文芸の中で、特に *uwepeker* ではそのストーリーの設定が語られる冒頭部分では、主人公の家族関係や仕事などその時の現状について説明される。このオリエンテーションにおいては、*uwepeker* では否定表現が用いられる場合がある。下の用例は (9) と同様の文であるが、ここで「問題」を表す否定発話ではなく、主人公の性質などについて述べる。

(12) *Iskar emko ta sino nispa a-ne hine an-an hike*
Ishikari.river up.stream LOC truly rich.man 4.A-COP CON exist.SG-4.S CON
pak ison kur isam ison kur a-ne,
till be.a.good.hunter person exist.NEG be.a.good.hunter person 4.A-COP
pirka menoko a-macihi ne wa a-hekote katkemat po hene
be.beautiful woman 4.A-wife COP CON 4.A-wife lady on.top.of.all or
i-pirkakor kor ...kor i-nunuke kor oka-an pe ne kor ora
4.O-cherish PROG PROG 4.O-take.care.of PROG exist.PL-4.S NMLZ COP then then
posak-an wa poeykoytupa-an.
not.have.children-4.S CON desire.children-4.S
「私は石狩川上流の本当に裕福な男で、私ほどの狩の名人は他になく美しい女性を妻としていて、その妻がさらに、私を盛り立て、尽くしてくれながら暮らしていたのですが、私たちには子どもがなく、欲しいと思っていました。」
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：N001P.003-007）

上記では、二つの否定的な要素が見られる。まず、二行目において、主人公の性質・能力に関して、「*pak ison kur isam ison kur a-ne*」に、非存在を意味する「*isam*」が用いられる。なお、この否定的要素は主人公の存在を否定しているのではなく、文否定よりも構成素否定（*constituent negation*）として解釈すべきであろう。実は、この現象ついては Bugaeva（2015）で考察されている。Bugaeva（2015: 43）によるとこのような構造は慣用的な最上級表現の一つであるといい、つまり、「（私は）狩猟の上手な人がいないほど狩猟が上手な人である」のように、主人公に当たる性質「*ison kur*」が否認されず、むしろこれが強調されると考えられ、「非常に狩猟が得意な人である」を意味する。このように、主人公に関する命題の否認ではないが、否定による最上級表現を通じて主人公の特殊性および非現実的なスキルが強調される。同時に、現実世界における聴者の注意を引くために機能している面もあるのではないか。

また、主人公の過去は物語の冒頭部分では未知であり、なぜあるスキルを持っているのかなども主人公自身に分からないという場合もある。次のコンテクストはそういった、物語の最初の方で主人公が一人で暮らしている話である。

(13) *ne ene iki wa an pe a-ne hi ka a-eramiskari no poro cise*
what like.this do CON exist.SG NMLZ 4.A-COP NMLZ even 4.A-know.NEG CON be.big house

[17] Yamada（2003）は主に Labov and Waletzky（1967）と Labov（1972）の物語の構成に関するモデルに基づいている。

or ta yayesikarun-an. matkaci a-ne hine an-an pe ne ruwe ne hine,
place LOC recall-4.S young.woman 4.A-COP CON exist.SG-4.S NMLZ COP INF.EV COP CON
nen i-epakasnu ka somo ki korka, nep ne ruwe ne ya muye a-kar wa,
who 4.O-teach even NEG do but what COP INF.EV COP Q bundle 4.A-make CON
parka esik wa okay pe, yayesikarun-an hi orano a-rapte.
ceiling be.full CON exist.PL NMLZ recall-4.S NMLZ then 4.A-take.down
ni a-kor a-otkeotke wa a-rapte wa wor a-omare wa a-huraye wa,
wood 4.A-hold 4.A-stick CON 4.A-take.down CON in.water 4.A-insert CON 4.A-wash CON
nen i-epakasnu somo ki korka, ape a-ari.
who 4.O-teach NEG do but fire 4.A-make(.a.fire)
「どうしてそういうことになっているのかわからないが、物心ついたときには、私は大きな家に住んでいた。私は女の子であった。誰に教わったわけでもないけれど、なんだか束なって棚の上いっぱいにあるものを、物心つくようになってから、下におろした。棒でつっつきつっつきしておろして、水に漬け洗い、誰におそわったわけでもないが、火をたいた。」

（NINJAL：K7708242UP.1）

上記は、一行目から物語が始まり、冒頭部分における主人公は自分の現状について語り、様々な家事をする知識を持っていることが伝えられている。まず、この時点にどのように辿り着いたのかについて「*a-eramiskari*（私が分からない）」と主人公が述べている。さっそく物語の始まりにおいて、主人公の存在に関して謎めいた状況が語られる。このような始まり方は多少見られるが、明白に「X 村に住み、両親を持っている」という主人公よりも、聴者は謎に囲まれた主人公の方に、より注意や興味を引かれるのではないかと考えられる[18]。すなわち、「*nen i-epakasnu*」では「だれかに教わった」ことが否認され、そのあと *parka esik wa okay pe* (…) *a-rapte* の部分で主人公の行為について語られる。この否定文の前のコンテクストにおいては、「だれかにスキルXを教わった」という肯定内容が具体的に存在しないため、「*nen i-epakasnu ka somo ki*」は暗示的な否認として分析できる[19]。また、この「家事を教わる」という前提は、どういった背景情報から生じるかと考えると、かつての伝統的なアイヌのコミュニティにおいては、性別によって父あるいは母が息子あるいは娘に教える内容が異なる（久保寺 2004: 183-184）。つまり、親が子供に重要な知識やスキルを教わった。したがって、ここで否認される前提は「親に教わる」というスキーマから生じるであろう[20]。

[18] また、聞き手が存在する現実世界と物語の世界の格差を強調することも考えられる（ヌルミ 2023b）。また、このような主人公のパターンもよくあり、主人公は大抵村長の娘であり、例えば火を焚くことなどができるのはカムイが主人公の成長を見守っているからであるという（中川 1997: 91）。

[19] 否認（*denial*）は明示的（*explicit*）と暗示的（*implicit*）に二分される。明示的なのは、前のコンテクストで明白に発せられた命題が否定によって否認されるものである（Tottie 1991: 21）。一方、暗示的なのは、前のコンテクストから想定あるいは推論できるが、明白に発せられない命題、あるいはその前提の否認である（同書）。

[20] ここで、スキーマを山田（2013）に従い、「ある物事に対して通常連想される背景知識全般」として扱う。

5.4 最終部分における否定表現

前節では、物語の冒頭部分や主人公の紹介における否定表現について述べたが、ここでは物語の最終部分に注目する。最終部分においては、主に評価的なコメントあるいは語り手のモラル的コメント（*moral comment*）という、物語の伝えらえる価値を表す否定表現が現れる（Yamada 2003: 347）。つまり、「なぜこの物語が伝えられたか」という疑問に対してコメントし、あるいは「あるべきこと」を伝える（Yamada 2003: 372）。

アイヌの物語の中では、いわゆる *Pananpe-Penanpe* 物語がある。これは、*Penanpe* および *Pananpe* という二人についてのものであるが、*Pananpe* が危険な状況にあうが、結局成功し豊かになるというパターンがある（Endō 2022: 377）。これを羨む *Penanpe* が同じように豊かになるために *Pananpe* をまねするが、最も重要なことを失敗するので死亡する（同書）。このような物語は主に子供に対して語られていたという（同書）。しかし、*Pananpe-Penanpe* 物語は、教訓を伝えているのかについては様々な意見がある。例えば中川（1997）では、*uwepeker* で勧善懲悪という教訓がよく伝えられるが、*Pananpe-Penanpe* 物語は異なり、「人のまねをするなよ」という文が付いていても、教訓として伝えるのが *Pananpe-Penanpe* 物語の目的であるとはとても思えないとされている（中川 1997: 128, 130）。一方、久保寺（1972: 23）では、「[*Pananpe-Penanpe* 昔話の] 内容も滑稽なものが多いようであるが、そこに幾多の教訓がふくまれていることも見のがせない。」と述べられている。おそらく、教訓やモラル的コメントとしての解釈は完全に不可能ではない。

下記で記述したものにおいては、否定的な命令であるが、*Penanpe* の行為に関するコメントがみられる。

(14) *"akketek hopuni hopuni, akketek hopuni hopuni, akketek hopuni hopuni."*
scallop fly fly scallop fly fly scallop fly fly
sekor hawean akusu. toop herikasi hopuni hine
QUOT say then far.away upwards fly CON
orowano toop nitay enka peka hopuni hine arpa hine
then faraway forest high.above LOC fly CON go CON
toop kim ta arpa kor arhorikasi turse hine
faraway mountain LOC go then a.really.high.place(?) fall.down CON
turse akketek ka terke hine isam pe ne kusu
fall.down scallop also jump CON exist.NEG NMLZ COP reason
tu ray wen ray ki kusu iteki iteki eytasa ikor rusuy
be.awful die be.bad die do reason PROH PROH a.lot valuable DES
pe ka poronno nep ka a-kor kusu ne.
NMLZ even a.lot what even 4.A-possess reason COP
nisapno nispa a-ne kusu ne sekor iteki yaynu p ne.
suddenly rich.man 4.A-COP reason COP QUOT PROH think NMLZ COP
「『ホタテ飛べ飛べ、ホタテ飛べ飛べ、ホタテ飛べ飛べ』と言うと、遥か上のほうに飛んで、それからずうっと林の上などを飛んで行って、ずうっと山の方へ飛んで行き、すごく高いところから落っこちて落ちたホタテも飛んで行ってしまったので、

ひどい死に方、悪い死に方をしたので、あんまりものを欲しがったりしてはいけません。（そういう）ものは、何かたくさんもらうことになりますよ。にわかに長者になろうと思ってはいけません。」

（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：N008P.990-1000）

ここで、*Penanpe* は *Pananpe* に従い、鯨の肉をホタテの口の中に多く入れる。しかし、次に早く家に着くように *Penanpe* がホタテの上に登り、「*akketek hopuni hopuni*」といういわゆる魔法の言葉をいう。そうすると、ホタテに乗っている *Penanpe* がホタテと共に急に飛んで行き、落ちてしまうと死亡するということが語られている。最後に、「人のまねをする」や「物を欲しがる」などのような、「羨むことの良くなさ」に関して評価的なコメントが伝えられる。上記の用例では、二つの評価的なコメントがみられる。まず「*iteki iteki eytasa ikor rusuy*」では、「宝物をたくさん欲しがる」ことが否定的な命令文によって禁止される。次に、「*nisapno nispa a-ne kusu ne sekor iteki yaynu p ne*」では、「『お金持ちに早くなる』と思う」ことが否定的な命令文によって禁止される。この二つの禁止は、おそらく語り手の *Penanpe* の行動に関するコメントとして捉えることができる。言い換えると、「すべきでない」ことや「好ましくない」ことを伝えるのに禁止文が用いられる[21]。また、「豊富になるのに簡単な道がない」のような間接的な教えとしても捉えることが可能であろう。例えば「してはいけない」ことなどは、特に子供に対して直接的ではなく、*uwepeker* を通して間接的に伝えられることもあったという（萱野 1989: 13）[22]。

上記の用例と同じ話者が別の時点で語った、同様のテーマについて語った物語における禁止文の例を下記で紹介する。

(15) *hunak ta iwor or ta rik peka a-eyapkir hine*
where LOC valley.between.ridges place LOC high.place from 4.A-throw CON
tu ray wen ray ki. kusu iteki Penanpe ikoysanpa
be.awful die be.bad die do reason PROH up.stream.man imitate.someone
「どこか山奥で、高い所から、ほうり出されて、ひどいし方で死んでしまいました。ですから、ペナンペ、人のまねするんでないよ！」

（田村 1986: 20）

(14) と似たように、ここでも、*Penanpe* は *Pananpe* の成功で羨ましく、*Pananpe* を真似し、結局 *Penanpe* は良くない結果に至るという傾向が見られる。そのため、語り手は *Penanpe* に対して、「人のまねをする」という行為をしないようにすすめている。Yamada（2003: 373）によると、このようなモラル的なコメントは主に「であるべき状態」を伝えるため

[21] 例えば Yamada（2003: 373）では、「*narrators sometimes use negative utterances to make moral comments on how things ought to be*」のように、否定発話は時にあるべき状態と思うことに関してモラル的コメントをしていると指摘されている。また、「*these moral comments should be general statements expressing the narrators' moral stance on issues related in their narratives*」とされ、つまりモラル的なコメントは、語り手の“モラル的な立場”（*moral stance*）を表す、物語に関する主張であるべきであるとされている（同書）。

[22] 物語（*narrative*）は、テキストの中でいわゆるメタ・ジャンル（*meta-genre*）として捉えられ、「ストーリーを伝える」ばかりなく、普段他のテキストタイプ（*text-type*）が伝達する意味・機能、例えば議論（*argument*）や記述（*description*）や説明（*exposition*）などを伝えることが可能である。なお議論は物語という談話機能を伝達するのに使用不可能である（Virtanen 1992; Georgakopoulou 2011: 191）。萱野（1989）で述べられているのもこの捉え方に当てはまりそうであり、物語を通して教訓のようなものが伝えられる。

に用いられ、特に物語の最後によく現れる。この *Pananpe-Penanpe* 物語の例も似たように、物語の最後に発言されている。これ似たようなコンテクストについてすでにヌルミ（2023a）で少し触れられている。ヌルミ（2023a）では同じ用例が扱われ、禁止は何を対象としているのかについて考察され、禁止の焦点は *Penanpe* になっているのかという疑問が出された。つまり、*Penanpe* はしていけないが、他の登場人物はしても良いのであろうかという疑問であり、また、文字通りは *Penanpe* に対して禁止が行われているが、物語が語られている当時にその場でいる聞き手の全員が対象となっている可能性がある（ヌルミ 2023a: 101）。本研究では否定発話の相互作用的な側面にも注目し、この否定の使用を「受け手指向」として捉え得ると考えられる。すなわち、聞き手の注意を引くために「*Penanpe* のようにするな」とコメントをしていると考えられる。

(16) *Penanpe* *ray wa isam* *ruwe ne kusu,*
up.stream.man die CON exist.NEG INF.EV COP because
tane oka *Penanpe* ***iteki*** *ikoysanpa* ***yak pirka****!*
now exist.PL up.stream.man PROH imitate.people if be.good
「ペナンペは死んでしまったのですから，今いるペナンペたちは，人真似をするんじゃないよ！」

（田村 1985: 68）

上記と似たように、この用例も物語の結語として発せられる。二行目における否定的な命令文をモラル的なコメントとして解釈するのが可能である。しかし、一つ問題点が残っている。それは、この発話は物語の一部であるか、そうでないのか、いったいだれの発話なのであろうかということである。一つ可能な考えは、これを話し手のちょうど語った物語についてのコメントであり、この場合は主人公の一人の行動を評価しているという物語自体に含まれる発話ではないのかというのは疑問である。どちらにしても、評価として解釈し得るであろう。また、(16) では、*tane*「今」と複数形の *oka*「ある」が用いられるため、原文における訳のように、物語の中の世界の *Penanpe* よりも、聴衆にいる聞き手に対するコメントの可能性もゼロではない。このように分析すれば受け手指向の考え方に近い。

6. 考察

上記で紹介した様々な用例について更なる考察をしたい。否定発話の使用はストーリーを展開させる機能がみられるとされているが（Yamada 2003）、その否定発話がどのように機能しているかを判断するのは単純とは限らない。「問題」を提示するように機能し得る否定発話に関しては、誰（＝どの登場人物）の視点からの問題として捉えられるのかということにも注意する必要がある。例えば、(10) で取り上げた「*hosippa isam*」は、語られる際に登場人物の視点からみれば、問題でも非問題でもないという分析の方が正しいかもしれない。本稿では、否定の中和的な使用に厳密に取り組む予定ではなかったため、それほど詳しく分析を行わなかった。しかし、この「*hosippa isam*」が現れるコンテクストをみれば、ストーリーのその時点、そしてその直後も主人公が帰って来ない人を探しにいくわけではなく、時間が少し経ってから出発するということが分かる。したがって、この否定発話はその時点における話題に背景情報を与えているという解釈も可能なのであろう。しか

し、主人公が出発しなければストーリーが展開しないので、札幌へ出発することとなる。したがって、結局主人公の立場からみても問題である。

また、登場人物の紹介の際に現れる否定表現の中で文否定も構成素否定の使用も確認できた。どちらの場合も、否定を用いると登場人物の特別な存在、スキル、能力などが強調されているような効果がみられる。例えば「*nen i-epakasnu ka somo ki korka*」の場合、「誰かに教わったわけではないが」のように、物語のこの時点では登場人物は自身の過去についての情報を持っていないが、問題なく一人でも生活できる。このような使用は、聞き手に「この登場人物は特別であろう」と思わせる効果があり、語り手が聞き手にストーリーに関して重要な情報を与え、聞き手の注意を引こうとしていると考えられる。論理上では、少し矛盾している面もあるといえる。「一人で生活できる」という状態に重要な「(誰かに)教わった」という条件が満たされないにもかかわらず、「一人で生活ができる」ことが達成されるからである。

物語の最終部分におけるモラル的コメントについても述べたが、既述したように、このようなコメントは物語に含まれている文として解釈するか、その物語を実際に語っている話し手のコメントとして解釈するか、どちらとして解釈すべきかが問題である。本研究で扱った資料の中では、特に *Pananpe-Penanpe* 物語は、このようなコメントで終わる傾向を確認できたが、著者自身がインフォーマントをインタビューし資料を集めたわけではないため、この禁止文の本来を確認することが難しい。一方、*uwepeker* は一般に、最後に「～と主人公が語った」のような引用表現で完結することが多い（中川 1997: 108）。このような表現の際は、モラル的コメントはストーリーの中の主人公が伝えていると捉えられるかもしれない[23]。

(17) *somo okay pe kaskamuye a-oyamokte cape anakne*
NEG exist.PL NMLZ possessive.spirit 4.A-think.strange.of cat TOP
iteki a-respa p ne na sekor sino nispa isoytak
PROH 4.A-bring.up.PL NMLZ COP SFP QUOT truly rich.man tell
「…あろうことか憑神が変だと思うような猫は育てるものではないよと本当の長者が語った。」

（アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ N003P: 409-411）

例えば、上記でも取り上げた物語の最終部分に、主人公が「憑神が変だと思う猫は『育てるな』（という）ものだ」と伝えており、その直後「*sekor sino nispa isoytak*」という発話によって物語が完結する。上記で取り上げた *Pananpe-Penanpe* 物語と異なり、この用例に

[23] これに関しては、例えば中川（1997: 107-108）では次のように述べられる。「「けっしてこれこれのことをするなよ」という教訓が語られ、(…) それを最後にこのような形で集約すると、「教訓」ということになることが多い（…)。」（中川 1997: 107-108)。しかし、中川（1997）によれば、*uwepeker* は「人に教訓を与えるためのものだと思っている人もいるかもしれないが、別にそう考えなくてもよい」と言い、これらは『ある人間が自分の一生の体験のうちの重要な出来事を、自分の子孫に伝え残したいと思って語ったのだ』というだけのことであるそうである（中川 1997: 107-108)。すなわち、このような物語の最後にある禁止文は、必ずしも聞き手に対する教えのわけではないようである。教訓ではなくても、否定の使用は肯定よりも特別な前提が必要であるという考え方に従えば、このような禁止文も何かの機能を持っているはずである。例えば、聞き手をさらに笑わせ、*Penanpe* を馬鹿にする役割も考えられる。このような捉え方でも、「人の真似をするな」などのような禁止文は受け手指向として捉えられる。

おける禁止の表現が物語の中の主人公が伝えていることが引用表現の使用で明白になる。さて、このモラル的コメントをする方は、主人公なのか、実際に物語を語っている話し手なのか、どのように捉えればよいのであろうか。アイヌの口承文芸に関する先行研究では、多くの *uwepeker* は主人公が自分の話を進めて行く形をとっていると認識され、その物語は誰の語ったものだったのかは、実際にその物語を語っていた話し手が最後に述べる（中川 1997: 108）。一方、他の言語に関する先行研究（例えば Yamada 2003）では主に個人的な物語（話し手の過去の話）に注目されてきたので、このような「物語の中の主人公である語り手」と「実際に物語っている話し手」という取り分けがないが、発する方が異なれば少し発話も異なることがあるかもしれない。つまり、話し手自身の発話であれば、主観性が発生する。一方、主人公の発話であれば、物語の一部として捉えられ、間接的な忠告方法となると考えられる。一人称で語られる物語（主人公が物語っている）の方は、最後に「〜が語った」という表現で終わり、そこまでの発話は主人公の発話のように捉えられる。逆に、*Pananpe-Penanpe* 物語は、登場人物のセリフ以外に一般に三人称で（*Pananpe* が何かをした…）語られるため、第三者（実際に物語っている話し手）がモラル的コメントをしていると考えられる[24]。

7. おわりに

本研究では、アイヌの口承文芸の物語における否定発話の使用によるストーリー展開に関する役割に注目してきた。アイヌの口承文芸テキストにおける否定発話の、物語のストーリー展開に関する機能を主に対象としたが、多少語り手・聞き手の関係、聞き手の注意を引く効果がある否定発話にも触れた。英語や日本語に関する先行研究で取り上げられたストーリー展開機能の多くは、アイヌ語でも見られるといえるが、より具体的に調査する必要がある。

今後の課題として残っているのは、より多くの否定発話のコンテクストの分析である。今回は、様々な傾向があることについて論じたが、定量的なアプローチも必要である。例えば、アイヌの口承文芸テキストの中で用いられる否定文には、「問題」あるいは「非問題」を表すものがどの程度あるか、中和的な使用はどの程度確認できるかという課題が残っている。また、物語の冒頭部分に対して、最終部分に用いられる否定文はどの程度機能的に異なっているかという疑問点についてもより詳しく調べる必要がある。

また、本研究はアイヌの口承文芸テキストにおける否定発話のストーリー展開に関する機能に関する研究の試みであるが、定量的な観点から調査をする余地がなかった。したがって、今後の課題としてより総合的に定められた量のストーリーを研究対象とし、「問題」など様々なストーリー展開に関する機能はどの程度確認できるか、そして先行研究で取り上げられた機能以外の機能がみられるかなどという問題点も聴者の範囲に含める必要がある。そのようなアプローチで研究すれば、アイヌの口承文芸における *uwepeker* の構成や語

[24] しかし、例えば知里（1981 [1937]，幌別方言）に載せられている *Pananpe-Penanpe* 物語は、物語の最後に「”*tane okay Penanpe itekki itakkasi yan*” *ari Penanpe itak.*（「今後の *Penanpe* たちよ決して人にさからうなよ」と *Penanpe* が言った。）」という文が見られる。つまり、このコメントをしているのは物語の中の登場人物（*Penanpe*）であるため、物語の一部として捉えられる。

り方と否定発話の関係性をより具体的に明らかにできる。

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム（JPMJSP2119）の支援を受けたものである。また、匿名の査読者の方々より貴重なご指摘をいただいた。本稿を読んでいただいた北海道大学の佐藤知己教授にも深く感謝申し上げる。ただし、本稿における議論の不備などの誤りは、全て筆者に帰するものである。

略号一覧

1：1 人称（first person）4：4 人称（fourth person）A：他動詞の主語（transitive subject）APASS：逆受動（antipassive）APPL：充当（applicative）CAUS：使役（causative）CON：接続（conjunctive）COP：コピュラ（copula）DES：願望（desiderative）DIR：方向（direction）EV：証拠性（evidentiality）IMP：命令（imperative）INF：推量（の証拠性）（inferential）LOC：場所（locative）NEG：否定（negation）NMLZ：名詞化（nominalizer）O：目的語（objective）PERF：完了（perfective）PL：複数（plural）POL：丁寧（polite）Q：疑問（question）QUOT：引用（quotation）PROG：進行（progressive）PROH：禁止（prohibitive）REFL：再帰（reflexive）REP：伝言（の証拠性）（reportative）S：自動詞主語（intransitive subject）SG：単数（singular）SFP：終助詞（sentence final particle）TOP：主題（topic）

参考文献

Bugaeva, Anna（2012）Southern Hokkaido Ainu. In: Nicolas Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*, 461-509. London and New York: Routledge.

Bugaeva, Anna（2015）「An equivalent of the standard of comparison relativization in Ainu」『北方人文研究』8: 43-62.

Chafe, Wallace（1994）*Discourse, consciousness, and time: the flow and displacement of conscious experience in speaking and writing.* Chicago and London: University of Chicago Press.

知里真志保（1981 [1937]）『アイヌ民譚集』東京：岩波書店.

Endō, Shiho（2022）Ainu oral literature. In: Anna Bugaeva (ed.) *Handbook of the Ainu Language*, 363-392. Boston and Berlin: De Gruyter Mouton.

Georgakopoulou, Alexandra（2011）Narrative. In: Jan Zienkowski, Jan-Ola Östman and Jef Verschueren (eds.) *Discursive Pragmatics*, 190-207. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Givón, Talmy（1978）Negation in language: Pragmatics, function, ontology. In: Peter Cole (ed.) *Syntax and Semantics Volume 9 Pragmatics*, 69-112. New York: Academic Press.

Hatch, Evelyn（1992）*Discourse and language education*. Cambridge: Cambridge University Press.

Horn, Laurence R.（1989）*A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

Horn, Laurence R.（2010）*The Expression of Negation*. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.

Huddleston R. and Pullum G. K.（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hwang, Shin Ja J.（1992）The Functions of Negation in Narration. In: Shin Ja J. Hwang and William R. Merrifield (eds.) *Language in Context*, 321-337. Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington.
Kahrel, Peter（1996）*Aspects of Negation*. Doctoral dissertation, University of Amsterdam.
萱野茂（1989）『アイヌ ネノアン アイヌ』東京：福音館書店.
国立アイヌ民族博物館（編）「アイヌ語アーカイブ」https://ainugo.nam.go.jp/［2023 年 10 月 1 日アクセス］.
久保寺逸彦（1972）『アイヌの昔話』昔話研究資料叢書別巻．東京：三弥井書店.
久保寺逸彦（2004）『アイヌ民族の文学と生活』久保寺逸彦著作集 2．東京：草風館.
Labov, William（1972）The transformation of experience in narrative syntax. In: William Labov (ed.), *Language in the inner city: Studies in the Black English Vernacular*, 354-396. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Labov, William（1997）Some further steps in narrative analysis. *Journal of Narrative and Life History* 7 (1-4): 395-415.
Labov, William and Waletzky, Joshua（1997 [1967]）Narrative analysis: Oral versions of personal experience. *Journal of Narrative and Life History* 7 (1-4): 3-38.
Leech, Geoffrey（1983）*Principles of Pragmatics*. London: Longman.
Miestamo, Matti（2022）Negation and negatives. In: Marianne Bakró-Nagy, Johanna Laakso and Elena Skribnik (eds.) *The Oxford guide to Uralic languages*, 922-935. Oxford: Oxford University Press.
中川裕（1997）『アイヌの物語世界』東京：平凡社.
NINJAL＝中川裕, アンナ・ブガエワ, 小林美紀, 吉川吉見（2016-2021）「アイヌ語口承文芸コーパス―音声・グロス付き―」. 国立国語研究所 https://ainu.ninjal.ac.jp/folklore/［2023 年 10 月 1 日アクセス］.
ヌルミ ユッシ（2023a）「アイヌ語の否定表現―類型論的観点から―」『アイヌ・先住民研究』3：83-116.
ヌルミ ユッシ（2023b）「アイヌ語における否定の否認機能―口承文芸での使用―」日本北方言語学会第 6 回大会口頭発表．新潟大学とオンライン, 2023 年 11 月 18 日.
Pagano, Adriana（1991）*A Pragmatic Study of Negatives in Written Text*. Unpublished master's dissertation. Florianópolis: Universidade Federal de Santa Catarina.
高橋靖以（2016）「アイヌ語十勝方言の否定構造について」『北方言語研究』6: 73-79.
Takahashi, Yasushige（2022）Aspect and evidentiality. In: Anna Bugaeva（ed.）*Handbook of the Ainu Language*, 613-627. Boston and Berlin: De Gruyter Mouton.
田村すゞ子（1977）「アイヌ語沙流方言の命令表現」『アジア・アフリカ文法研究』5：82-201.（2001 年複製『アイヌ語考 5―文法 II』22-141. 東京：ゆまに書房.）
田村すず子（1985）『アイヌ語音声資料』2. 東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子（1986）『アイヌ語音声資料』3. 東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館.
田村すず子（1997 [1988]）「アイヌ語」亀井孝，河野六郎，千野栄一（編）『日本列島の言

語』1-88. 東京：三省堂.

Tamura, Suzuko（2000）*The Ainu language*. Tokyo: Sanseido.

Tottie, Gunnel（1991）*Negation in English Speech and Writing: A Study in Variation*. San Diego: Academic Press.

Virtanen, Tuija（1992）Issues of Text Typology: Narrative – a “Basic” Type of Text. *Text* 12：293-310.

Yamada, Masamichi（2003）*The Pragmatics of Negation – Its Functions in Narrative*. 東京：ひつじ書房.

山田政通（2013）「否定表現の談話分析：歌詞をデータとして」『拓殖大学語学研究』128: 13-48.

Negation in Ainu Oral Literature Texts: Storyline Functions

Jussi NURMI
(Hokkaido University)

Keywords: Ainu language, negation, speech functions, pragmatics, narrative analysis

This paper examines negative utterances in Ainu (Saru dialect) oral literature texts from a pragmatic point of view, focusing on so-called *storyline negation*. Such negative utterances are regarded *evaluative*; they express the defeat of an expectation that something would happen, but it did not. Evaluation also contributes to the reportability of the narrative and emphasizes important events in the narrative; non-events that are brought from the background to the foreground of the narrative. Furthermore, it functions to develop the storyline of a narrative, as well as to create interactional aspects to the narrative.

Following previous research (Yamada 2003), this paper observed functions of storyline negation, such as indicating a *problem* or a *turning point* in the narrative; or expressing as a *moral comment* by the narrator. The analysis exhibited that negative utterances can be seen to express said functions in Ainu prose tales. For example, a negative utterance expressing a problem from the protagonist's point of view contributes to the development of the storyline, since action is usually taken by the protagonist to solve the said problem.

This research contributes to the understanding of the pragmatics of negation in Ainu, which has seen limited research from a pragmatic point of view. Furthermore, this analysis provides some insight to the use of negation as an element to develop the story in Ainu prose tales. Also, it is argued that negative utterances may add interactional aspect to the narrative; a recipient design which maintain the hearer's interest. Moreover, negative utterances in character introductions can be seen to emphasize the uniqueness of the protagonist – creating a gap between reality and the story world.

However, even though this paper provides some explanation for use of negation in Ainu oral literature narratives, it is inadequate to produce a comprehensive understanding of the pragmatics of negation in Ainu prose tales. First, an analysis of a larger number of texts is needed to determine the tendency of different functions. Also, since only *prose tales* were under the scope of this paper, a comparative study of divine epics (*kamuy yukar*) and heroic epics (*yukar*) should be considered to examine whether different genres display distinct uses of negation.

（ぬるみ・ゆっし　nurmij@elms.hokudai.ac.jp）